

大妻女大 家政 松山容子 ○秋月光子

都立立川ろう学校 中山繁美

目的：衣服の仕上り寸法をきめるには、身体寸法を基礎とするのは当然であるが、同時に着用感、形態適合感の面からの検討も必要であろう。ところが、これらの感覚には個人差が予想される。特に既制服の設計を念頭においた場合には、感覚の変異の状態を把握しておくことがより重要であると思われる。この様な観点から胸囲とスカート等のベルトの関係をとりあげ、いくつかの検討を試みた。

方法：大学女子学生 200名を対象とし、日常着用しているスカートについて、サイズ選択と好みをアンケート調査し、また、胸囲を含む計 6項目の身体計測を行った。さらに、任意のサイズに固定可能なベルトを製作し、それを用いて官能検査を行った。

結果：(1)スカート等の選択サイズと実際の胸囲計測値とを 3cmピッチの階級ごとに対比してみると、サイズ 60cm、63cmを選択する者は全体の約70%にのぼるが、計測した胸囲では約50%が該当するに過ぎない。また 66cm以上のサイズ選択者は20%であるのに対し、計測値では45%が存在する。したがって、身体寸法と合致しないサイズを選ぶ者、きつめのベルトに寛容な者が存在すると考えられた。

(2)個人にとっての最適ベルト寸法を官能検査「調整法」により求めた。これと胸囲計測値の相関係数は0.9で、両者の緊密な関連性を示している。しかし、回帰の傾きから、胸囲60～62cm辺りを境として、細い者では、ややゆるめのベルトを最適として、太めの者ではきつめのベルトを最適とする傾向がみられた。

(3)許容できるベルト寸法の上限值と下限値を官能検査「極限法」により求めた。胸囲の大きい者ほど上限値が胸囲を上まわることが少なく、下限値が計測値を下まわることが大きい傾向がみられた。また胸囲が大きい者ほど、許容幅は広くなるようである。